

【症例アレックス】〔男児、年齢：治療開始時13歳5ヶ月〕

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

- ・主訴；学校恐怖症（school phobia）。学校内での孤立。男子グループによる過酷ないじめに遭う。
- ・家族背景：母親とアレックスの二人暮らし。感情の交流は乏しい。母親はシニアスクールの教師。情緒的に不安定。抑うつ的。時折体調不良で寝込むことがある。父親は、アレックスが4歳頃、家を出てしまう。母親に暴力をふるうことがあった。厳格な権威主義者。その後間もなく両親は離婚。父親とアレックスは折々に週末など一緒に過ごすことがあったが、アレックスが12歳頃、父親は死亡。成人した兄と姉がいるが、結婚してそれぞれ別々に家庭を持つ。

■資料その1；アレックスについてのメモ書き(報告書) (日付；1976年4月21日)

アレックスはこの2か月近くセッションには毎週定期的に通っており、予約時間にどうにか間に合うようにやってきます。しかしながら、彼が病院の受付を訪れた際に時間をまるで気に止めているふうではないことが奇妙といえは奇妙なのです。あと何分経てばMiss Yamagami が迎えに来るか、或いは遅刻したからどのくらいセッションの時間を失ったのかとか、まるで念頭に上らないようなのです。それは恰もある意味で‘授乳するオッパイ’としてのわたしに対する熾烈な欲望を敢えて自ら嘲^{あざけ}っているともいえそうです。<どうせかまっちゃいない。どうせ時間どおりになど来るもんか・・・>といったふうになら。そして、セラピールームに入った途端、わたしが彼に出てゆくように言うのではないかと彼は考えてしまうようです。彼はどのくらいわたしと一緒に時間があるのか、セッションの時間は後どのくらい残っているのかといったことはほとんど考えないようなのです。ただ単純に今にも誰かがやってくる（授乳するオッパイ＝Miss Yamagami）を横盗りしてゆかないとも限らないといった、疑惑と不安で圧倒されてしまっているといえましょう。でも実際のところアレックスに時間感覚がないというのではなく、しばしばわたしに今何時かと訊くようになり、わたしの腕時計を覗き込むようになってゆきました。

‘授乳するオッパイ’をめぐっての葛藤は熾烈です。それが自分のもの・自分の占有物であることを誇示するのに、彼は自らの空想に延々と没入しきって、飽くことを知りません。その空想の一つはこうです。彼は「Metal X」という宇宙船に同一化します。この地球を他の惑星から訪れるありとあらゆる怪物たちの侵入を阻もうと躍起になって防衛に務めているのです。猛攻撃・猛反攻撃の応酬の果てに、「Metal X」は追撃に成功するわけですが、ここで興味深いのは、これらのグロテスクな怪物たちが猛烈に食欲でかつ破壊的であるということです。或る意味、それは彼の口唇愛的サディズムをこれら他の惑星からの怪物に大いに投影しているものと考えられます。それらの怪物はどれもが強烈な‘触手’を持っており、それらは地球上の至るところ（‘オッパイ母親’）に穴をあけることとなります。その触手とはいわば彼のサディスティックな‘舌＝ペニス’でもあるわけです。そしてそこにあるありとあらゆるものを残らずすくい上げ、それらをむさぼり食うわけです。その大きく開けた‘口’はロンドンの二階建てバスを

も一飲みにしてしまうほどなのだと彼は言います。そして地球(=オッパイ母親)を完全に消耗し尽くしてしまうのです。

因みに、アレックスは学校で<I've got a woman, Japanese! (自分に女の人が出来た。



日本人だぜ)>と吹聴したんだそうです。それで皆が大騒ぎしたんだとか。そんなふう
に彼らを挑発し、嫉妬心やら競争心を煽りな
がら、あちらこちらで火種をばら撒いて、内的



にも外的にも‘戦闘’を繰り広げてゆくようであります。同時に彼の「仮想
敵」、つまりは‘超自我的父親’、それは権威ある誰か、学校の校長そし
て転移上ではわたしの‘夫’(軍の将校なんだとか!)になります。ますます威嚇的で懲罰的でグロ
テスクなものになってゆきます(図例; 1976/04/05)。

彼は幼少時から心気症的な訴えの多い子どもでしたが、こうした空想の耽溺は四六時中繰り返し
起きていることなのでしょう。彼にはすべてがあまりにもリアルなのです。セッション中もしばしば頭痛やら
身体的な痛みを訴えますし、殊に彼の喉の^{のど}渇きの訴えは異常にも思われます。しばしば<疲れた>
という言葉が漏らすように、その疲労感やら空虚感にもそのまま反映されているものと思われます。

どうやらこの過剰に搾取されたところの‘母親オッパイ’というのは、性的に誘惑的であり、かつ害悪とも
いうべき人物に転換されることになり、しかもそれはサディステックで危険極まりない懲罰的な父親と結
託したものにもなります。それはおそらく早期のオッパイ&ペニス(=乳首)といった「結合両親像」
(combined parental figures)の繰り返されたイメージでありましょう。痛ましくも^{むご}惨いエディプス状況が
想定されます。それは迫害的で苛烈な超自我を表わしており、その結果、明らかにアレックスが「去勢
恐怖」に深く呻吟していることは充分察せられます。こうしたアレックスの空想が今後わたしとの転移関
係においてよりいっそう明らかになり強度を増して展開してゆくものと考えております。

Chizuko Yamagami

Child Psychotherapist

■資料その2; 総括レポート (日付; 1977年9月12日)

アレックスのセラピーは、1976年3月1日より開始され、週一回のセッションが9月29日まで継続さ
れてまいりましたが、それ以降回数を週3回に増やしました。彼の精神状態が極度に混乱している様
子がうかがわれ、セッションの回数を増やすことでいづれでも自己洞察を得ることができるようにとい
うことが望まれたからであります。そしてこのことは或る程度までは間違いなく成功したともいえるのですが、
それが彼にとって決して楽な取り組みではなかったともいえるわけですし、徐々にセッションを欠席がしち
くなってゆきまして、ついに彼の治療は1977年6月19日に終了に至りました。

たぶんアレックスは、‘オッパイをくれる母親’というものについて、ひどく気まぐれで故意に焦らすなど悪なるイメージに固執しているものと思われます。それは彼が誕生後間もなく預けられたベビーマインダーによる虐待(育児放棄)といったことが事実あったことを思えば、それも腑に落ちるわけであります。ヘルズビクターによってその事実が発覚する早期の6ヶ月ほどの間、彼は他に11人ほども赤ちゃんを抱えるところのベビーマインダーによって、ほとんど哺乳もおしめ替えも満足もされない状態で放置されていたもようであります。それは彼の描く絵にも明らかなのです。戦場の真っ只中であって行方を阻まれて「食糧輸送車Dinner Tank」が立ち往生しているといったことです。それは決して彼の許に届かないのです。それで、彼は飢え、乾きそして腹痛で身を振るほどの苦しみを味わっているというわけです。

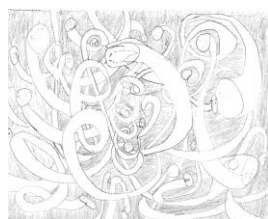
彼のこころの内では、‘母親オッパイ’とは手の届かない、遥か遠くにあるものなのです。それに出会うためには、彼は延々と続く長旅を強いられるということになります。それも遂に彼が例えば「ミルク・パーラーの母親オッパイ」に出会う前に、その途中では絶え間なく行く手を阻むところの悪意に満ちた障碍やら迫害やらに出会うわけであります。それらは頻繁に彼の絵のなかで例証されております。彼のこころのうちでは、巨大なる力溢れる無慈悲な悪魔・父親がいて、それに結託するところの出し惜みする、悪意ある魔女・母親というものが絶えず念頭にあります。そうした障碍もしくは妨害を打ち倒すためには、彼はまず彼らを制覇し、自分の支配下に置かねばならないということになります。それは彼自身が知力・腕力のありつたけを振るい、そして悪辣非道さを増すことによってなのであります。その攻撃性は、主に彼自身の口唇愛的貪欲さの色濃いものとなります。それについては彼の「Woman Catcher」という絵が例証になりましょう(図例; 1976/06/07)。



一見無感動で生気に乏しい印象からして、彼がこの‘オッパイ母親’に対して心の中で絶え間なく彼自身の口唇愛的な貪欲さでもって情け容赦のない狼藉を加えていることへの罪悪感に心底圧倒されていることがうかがわれます。しかも報復としての去勢恐怖は熾烈です。スズメバチに尻を刺されるといった彼の絵などはその例証でしょう(図例; 1976/07/07)。

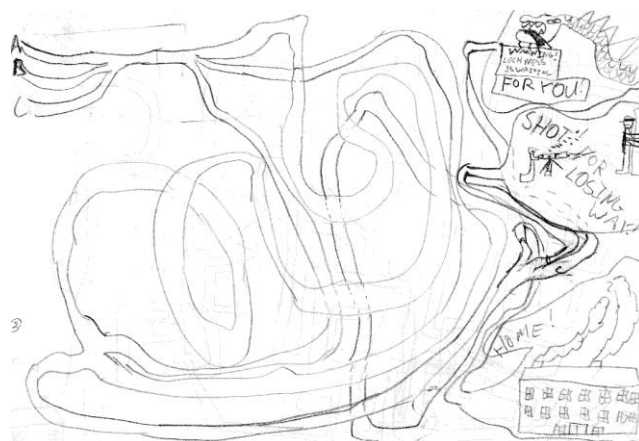
何よりも、アレックスにとって大事なことは、彼がどれほど甚大な破壊に及ぶとしても、母親の生き残りのために、そしてその安寧を得るために、それは彼自身についてもそうでありますが、良き守り手として

の父親が傍らで母親を建設的に支えているくれることなのでしょう。それを彼が気づくことが彼にとって重要不可欠なのです。そうした彼の試みの一つは、例えば火星の探検といった空想に例証されているかと思われます。そこでは人間が棲息できるように地下で科学者たちが試験的なアイデアをあれこれ模索していて、またその表面において土壌に何らかの資材として活用できるものがあるかどうかを調査していたりしております。それはこの時期に報道された、アメリカの科学者たちによる火星の探索に刺激されたものと思われるのですが・・・



しかしながら、それも夏休みでセッションがお休みとなりました時点で、ごくあっさりと放棄されてしまいました。その結果、彼はまるで

迷路のような地下の住人になってしまいます。どこもかしこも行止まりで(図例; 1976/09/03)、彼はそこで窒息寸前です。この閉所恐怖症的な状況は、或る意味彼がごくしばしば頭痛や腹痛を訴えることの原因を説明するもので



もありそうです。出口を見つけるのに躍起になる彼にとって、迷路のなかで右往左往しながら非情にも‘運’が試されます。我が家に辿り着くか、怪獣の口の中か、もしくは捕虜にされて銃殺刑に処せられるかといったふうに・・・(図例; 1976/09/06)。

この資料との関連で、一つわたしが連想いたしますのは、彼が幼少時一枚のバスタオルにしつこく愛着したということです。それが汚れて洗濯しなくてはということで取り去られようものなら彼はパニックを起こし大騒ぎしたということです。断固抵抗し、掴んで離そうとしなかったとのこと。このことは、彼が‘母親オッパイ’の内側に「フィルター(濾過)機能」としての‘父親ペニス’が存在していることを認めることを頑強に拒んでいるということを示唆すると思われます。彼の愛着する一枚のバスタオルが意味するものは、彼のこころの中では‘オッパイ母親’だからであります。それを嘔むなりさんざん痛めつけるなり、彼の排泄物によって汚すといったことによって、それを彼は万能感的に支配できるといったふうに解釈されましょう。そしてそれが一旦洗い流されるとしたら、彼の破壊衝動は無力化されることになり、従って彼より遥かに力のある存在としての父親が母親オッパイに居座っていることを認めざるを得ないことになり、ひどく脅かされるわけであります。この恐怖を乗り越えるために、彼はその肛門期的小児万能感を総動員し、‘父親ペニス’に攻撃を仕掛けるわけであります。彼は戦闘シーンが繰り広げられ



た絵を描くことに延々と3ヶ月以上も没頭したわけですが、地上が爆撃される惨劇シーンは実に彼の愛着したところの薄汚れたバスタオルそのものに見えましょう(図例;1976/10/20)。

セッションのたびごとに、彼は戦闘シーンを描きます。それは猛烈な爆破、砲火、そして爆発が起こります。彼の意図は、大地(=母親)を完全に荒廃させることなのです。飽くまでも軍の指揮官(=父親)の降伏を狙っているわけです。そしてすべての兵士たち(=母親の内なる赤ちゃんたち)を殺戮するもしくは撤退させるといったことが狙いです。またこの時期に彼は、ますますセラピーのセッションの外でも侵入的なパワーを発揮せんとするアクティングアウトが多くなります。例えば待合室での振る舞いなどから厄介者扱いされるといったことなど・・・。

アレックスの青年期性欲というのは著しく彼の小兒的(口唇愛的そして肛門期的)万能感的空想に彩られたものであります、従って彼の性的目覚めは彼のうちに甚大なる恐怖を惹き起こすことになったといえましょう。それは狂犬とか狂犬病を恐れるやら、また結果的には地球全土が荒廃をきたすといった彼の考えに表わされております。そこから彼が誰かに親しく接近を試みようとすることは非常なる損傷やもしくは病気を惹き起こすといったことを暗に意味するわけなのです。同時に



彼は、彼の男性性を巡って非情で懲罰的な父親の極端に悪意ある侮蔑に直面せざるを得ないことになるようなのです(図例;ダイビング 1976/09/20)。彼の内なる迫害を否認するために、彼は治療的枠組みに徹底抗戦するわけです。この場合、わたしは転移上‘結合両親像(カップルとしての親)’といったふうに見做されております。ありとあらゆる戦略、侮蔑的な懐柔策、もしくは策略を用いて、殊に彼の兄もしくは学校の男の子たちと同性愛的に共謀して・・・こうした彼の無益なる格闘は、スズメバチの強襲もそうでしたが、父親による性的虐待を恐れているということが底に見え隠れします。それもしばしばセッション中に彼の勝ち誇った躁的な高笑いによってごまかされるのですが・・・。

こうしたことの他に、彼の異性愛的パートナーを求める願望もあり、それは或程度のところ実現されております。それは偶然たまたま路上で出会った女の子から友情を得ることが出来たからです。だがそうした現実も、彼の空想のなかでは他の青年期の男の子らを相手にしての競い合いがますます激化する契機となるばかりで、それだって彼の危険極まりない敵対的嫉妬心を含むライバル意識を彼らに強烈に投影するからなのです。

彼が「三者関係」というものに決して心を向けることがなかったということは目立って特徴的かと思われます。それも遡れば母親の父親との繋がりもしくは連携といったことについてまったく否認してきたせいであ

りましょう。そして徐々に彼がこうしたことに自覚を得始めたとき、特に転移状況においてわたしに両親の性的関係性を認め、そして彼の反抗的な介入がわたしにどんな影響力も及ぼさないといった理解をもたらしたといえましょう。これは彼にとってみれば耐え難いことなのです。彼が完全に惨敗を認め、そしてその痛みを覚えるとき、彼は彼の危険な破壊的衝動やら、わたしの身に及ぼす損傷についての罪悪感そして恐怖によりいっそう敏感に意識が働くことになってまいりました。それがゆえに彼は治療からの遁走を図ったということになりましょう。しかしながら、興味深いことに、セッションを終える際、彼は真面目な顔でわたしに引退するかどうかを問います。それはわたしが持てるすべてを、彼の貪欲そして搾取がゆえに、使い尽くしてしまったものかどうかの確認を意味しております。それは彼の二番目のベビーマインダーについて彼が感じたところのものに似ておりましょう。彼の言うところによりますと、彼女は彼の養育を辞して以降、まったくのところベビーマインダーの職を諦めたということでしたから・・・（彼の後にはもはやどんな赤ちゃんも養えないということになります。）そこで‘オッパイ母親’に対する彼の万能感的貪欲さ、そしてその結果として、消耗し尽くされ、もはや使い物にならない‘オッパイ母親’への罪悪感彼の心のうちで尚も未解決なまま深く刻印されているものとうかがわれます。

このことこそが、彼の自尊心やら自己価値の問題、それに自分であることそして将来どういう自分になるうとしているのかを引き受けるといった責任能力の問題を惹き起こし、今後自らの人生への信頼感を勝ち得るといった能力が多分に阻害されてゆくのではなからうかと憂慮されます。

Chizuko Yamagami

■資料その3; アレックスについての総括レポート（日付不明）

〔※セラピー再開の経緯について; 振り返って思うに、アレックスには援助されたいという欲求はなかった。だが主治医であるDr. Bailyは彼の母親のコンサルテーションを継続していて、依然として息子アレックスについて深い焦慮を抱く母親から改めて要望がなされた。アレックスは不安やアンビバレンスをそっくり母親に投影していて、彼女はそれに対処するすべを持たず疲労困憊していた。母親のみならず、関係者はそれぞれに彼への懸念を深めていた。Dr. Baily、PSWのMrs. Davis、そしてわたしが会議を持ち、アレックスのセラピーの再開について論議された。この時点でグループセラピーへの導入は時期尚早ということで、やはり個人セラピーだろうということに落ち着き、わたしは承諾した。その結果1977年11月7日にセラピーは再開されたが、この時点でアレックスは15歳2か月という難しい年齢にあった。青年期特有の、心的痛苦に対抗すべくありとあらゆる防衛手段に頼るであろうことは十分に予想された。一緒に考える関係性を築くことができるものかどうか、わたしに一抹の不安はあった。案の定、無断欠席やら大幅な遅刻などが頻回となり、4ヶ月というごく短期間で1978年2月29日に彼の治療は打ち切られた。総括レポートに、私は次のように彼の印象を書き綴っている。〕

アレックスの外的対象との関わりは概してとても巧妙で策士的なものであります。それも彼ら(対象)が彼の要求を満たす限りにおいてですが・・・彼の心のなかでは彼らは受身的な存在であり、ですから

彼の都合次第で彼らはどんなふうに使われ捨てられてもかまわないということになります。彼にとって彼らが彼に何事かを期待しているとか、だから自分にもそれらに応える必要があるといったことはまるで念頭にないようであります。彼はしょっちゅうひとを故意にイライラさせたり怒らせたりするといった子どもなのです(その最初は母親でしょうが・・)。そうすることで対象の内側に侵入し、彼らを内側から支配せんとするわけです。それが彼の「心の内的現実」といえましょう。しかしながら、彼が彼らに投影するもののせいで、それは彼の口唇期的及び肛門期的な破壊衝動なのですが、彼が対象を万能感的に捕捉した途端に、彼はいとも容易に「閉所恐怖症」に陥ってしまうのです。そんなふうには彼は四六時中熾烈な迫害に耐えなくてはなりません。そして主にそれは父親的イメージなのですが、突き刺すような目を持った威嚇的な誰かが絶えず彼に睨みをきかしているといったふうです。去勢恐怖は彼にとってあまりにもリアルなのです。そこで躍起になって彼は躁的否認 denialへと遁走するわけであります。そして外界からの要請とか要望に対してまったくのところ意に関せずといったふうにならざるを得ないことになります。そうした彼の不誠実さは、自分の内側でどんなことを感じどんなことを考えているのかについても同じく無頓着を装うことになります。従いまして、アレックスは「諦められることで諦める」という、いつもの戦法に出たものと思われれます。セッションの無断欠席やら、時には大幅に遅刻するといったことが続きましたため、残念ではありましたが、治療の打ち切りという決断に至りました。

こうした理由から、アレックスの心的痛苦そして懊悩について多くの理解を得ようとする試みはさほど成功しておりません。しかしそうであったにせよ、セッションが継続している間、一見して進歩がそれほど歴然としたものではなかったにしろ、彼の迫害的不安はしばらくの間辛うじて抑え込まれていたといえましょう。われわれとしては、将来対人関係において彼が健常であり続けられるかどうか、さほど希望は持てないのではなからうかと感じているわけです。しかしながら、ここで思いますに、現実が彼に何かしら教えてくれることがあるだろうということです。彼が万能では決してないということを、そしてそれでも尚彼自らに成長するチャンスは与えられているということをいつか信じられればいいのですが。そしてその意味でも、ここでの治療をとおして彼が幾らかでも「現実」というものを学んだということは言えなくもありませんでしょう。つまり、現実とは最終的には彼の願望に都合よく従わせられるものではないということ・・。

Chizuko Yamagami

■ 後記

これほどまでにエディプス葛藤が苛烈で、去勢恐怖が執拗である症例は他にあまり経験していないというのがわたしの率直な感想だ。アレックスの生後6ヶ月の間での惨憺たる保育状況は想像するだけでも恐ろしい。12人もの赤ん坊が居たという。このチャイルドマインダーは後に告訴され、実刑判決を受けていると聞く。事の深刻さがうかがわれる。これ以降、アレックスがこの‘生き地獄’の記憶 memories of feelings をそのまま反復強迫しているのは疑いない。家庭でも学校でも・・。アレックスの母親は生涯彼に対し負い目を抱えたことになり、その償いに膝を屈することしかできなかった。召使いのようにあしらわれるにしても唯々諾々と従っているふうで、二人の間では口論もないとのこと。尚、実

際のところアレックスは4歳で離別した父親とはその後も週末などに会っており、父親は末っ子の彼を自分の味方に取り込むために、結構甘やかし作戦に出ていたようだ。ご馳走やらプレゼントやら…。そしてそれにも関わらず、彼の去勢不安は宥められるどころか脅かしの苛烈さを増していつているのは何故だろうか？どこにも慈愛深い父親の片鱗など見当たらない。成人した兄そして姉がいて、交流はある。彼らは父親のように甘いわけではなく、どちらかという母親を庇おうとするからか、アレックスを時には厳しく叱咤することもあるようだ。飽くまでも彼の心の「内的現実」が問題となろう。彼の空想の殆どを占める主題は、クライン派でいうところの「結合両親像 combined parental figures」なのだ。それらは一体化され融合したままで、彼に対して結託して執拗な攻撃の手をゆるめないということだ。それぞれ父親そして母親という個々別々の人格は想定し得ない。いつまで経ってもそれぞれについてまっとうなりアルな像を結べずにいる。青年期の性衝動に目覚める頃、「結合両親像」はますますその呵責なさをエスカレートするばかり…。最後にはアレックス自らの手で去勢するしかなさそうな事態に追い込まれてゆく。彼には自己価値 self-value というものが極端に乏しい。

事実彼を身びいきする者は皆無なのだ。彼への評価は、誰もが手厳しい。それも辛辣で、時として非情にならざるを得ない。この症例について指導を仰いだスーパーヴァザーたちも…。Mr. Bremnerはわたしの直属の上司であったから、アレックスが遅刻やら無断欠席が目立つに従い、治療継続を断念するようにわたしに申し渡したし、タヴィストックでこの症例の指導をお願いしたMrs. S. Hoxterは、アレックスの印象として「針のない時計」というイメージをおっしゃった。つまり生きていた時間感覚が奪われているということ。一度など、＜無意味な (meaningless) セッションもあるわね…＞とわたしに慰め顔におっしゃった。だがわたしはそれに内心反発した。アレックスがかつて「無窮地獄」を生きていた赤ん坊だということを思う。待つことの意味も、欲することの意味も、すべてことごとくが水泡に帰す。毎度毎度のこと。そこにどんな意味があるのか。両親の離婚もそうではないか。自らの人生を生きて報われることを願うことは徒労でしかないと思われ、あらゆるものが無意味であるといったシニシズムで武装することによってでしか自分を支えられない彼がいても不思議はなからう。

わたしたち心理臨床家は‘意味のなさ’に耐えられない種族なのかもしれない。「意味を見つけること」に楽観的であったり、果敢であることができる。だがそれをそのままアレックスに求められるかどうか。深刻な問題は、事実彼が自分という存在の無意味さにさらに追い討ちをかけるように無意味さを重ねていったこと、つまり‘悪乗りする’彼がいたということ。倒錯的なシニシズムに凝り固まったということだろうか。一見すると、そのようにも見える。さらには間の悪いことに、あの当時、巷ではビートルズの解散が若者たちに大きな動揺をもたらしていた、アレックスはマスコミの煽るゴシップネタを鵜呑みにし、オノヨーコがその張本人だと語った。転移上同じ日本女性であるわたしはそのとばっちりを食べたと言えなくもない。いずれにしても彼にとって「異性愛」は脅かされていた。わたしを危険視することで忌避し、敢えて無関心を装い、よそよそしく距離をとろうとする彼がいたとしてもおかしくはない。

そしてここに、かつて総括レポートには書けなかったわたしの想いを書き残そうと思う。「まったくいいと無し」といった彼の印象とは違って、わたしにとって彼から学ぶことがいかに多かったかということ。実に忘れ難い症例であり、彼とのセッションは決して無意味ではなかった。彼の作画の才能はわたしを痛く喜ばせた。その意表を突く面白さに心底唸った。その猥雑さはアントナン・アルトーを彷彿とさせるが、構成度はアレックスが上だ。何よりもわたしが大事に思うところの「**自証的覚知**」というものがそこにかがわれる。つまり「自らを証^{あか}しする」ことにおいて彼は真摯であったといえる(！)。しばしば人を苛立たせ、うんざりさせるといった道化っぽい仮面の下に、それを私は見た。この衝撃は生涯忘れられない。今ではわたしの分析患者たちが語ってくれる夢についても時折同じような感嘆 awe！を味わうことがあるのだが・・。

此の度資料をまとめながら、一つ慰めを覚えたことがある。セラピーのセッションというのは心的葛藤に対処して行きつ戻りつするので、必ずしも最終ゴールに向けてまっすぐに至るといった終わり方は望めない。でも、その紆余曲折のプロセスの中でひょんなことで‘ブレイクスルー’というか、自らの覚知が自らを救わんとする何らかの閃きの訪れる一瞬がある。1977年の或る時期、アレックスは繰り返す同じような絵を描いていた。ひたすら波状の線が繰り返されるパターンである。実に無意味 meaningless としか思えない。ところが、やがてそれが「砂漠」だということがわかってくる。延々と砂地が果てしなく拡がり、



彼の眼は砂の波状に釘付けになっていた。ところが或るとき(図例；1977/04/25)、彼の絵の隅の方を見遣ると、なんとそこに影絵のようにラクダの隊商が見えた。さらにはその彼方に明らかにそのキャラバンがめざすところのオアシスがかすかに見えるではないか。それこそ虫眼鏡で見る

しかないほど、それは遙か彼方にせよ・・。歩みは続けねばならない。いつかきっと砂漠という灼熱地獄から抜け出せる。そんな心の乾きを癒すオアシスがこの地上に待たれているといったこと。それを彼は自分に示したのであったろう。しかし、それは改めてどれほど待たねばならないかを悟るわけで・・。だから待つことの試練、その過酷さそして侘びしさから取り敢えずアレックスとしては目を背けるしかなかったのだろう。待ちきれずに、尻切れトンボのようにあつけなく・・。そんな具合に彼はセラピーを終えたわけで・・。ここでふとわたしは思う。あのキャラバンそしてオアシスはまるで蜃気楼のように、ついにはかなく彼の心から消え失せてしまったのだろうか・・。その後のセラピーの再開に於いても、それは再び現れることはなかったのだし、どちらかというますます遠のいてゆく感じがした。しかしながら、それでも尚わたしは思う。彼には一度夢見たものがあるということ。それが時として蜃気楼のように掻き消えてしまっても、そして時として忘却の淵に葬られるにせよ、どこかでまた、ふとあの彼の夢が蘇ることがありはしないか。もしそれを諦めなければ、いつか<おれもそんなに悪くない・・>と、彼が素直にそう思える日もあろう。わたしはセッションの中で声なき声で彼に語りかけ続けた。生きろ！と・・。そして今尚も、<あなたはそれからどう生きたの？>と、心の内で彼に問い続けている。(2018/01/10 記)